

活



一般財団法人日本漢方医学研究所 漢方友の会

Vol.55

No.1

2013年

1 月号



年頭所感

..... 1

『医心方』全巻完結について

石野尚吾.....14

『医心方』完結に寄せて

槇佐知子.....14



平成25年、新年の挨拶

一般財団法人日本漢方医学研究所理事長

石野尚吾

平成25年 新年明けましてお目出度うございます。

新年に際し、会員各位のご健康と漢方医学研究所の発展を祈念いたします。昨年は一般財団法人への移行もありました。これまでの財団を振り返りつつ、新年のご挨拶を申し上げます。

I. 一般財団法人への移行

懸案でありました公益三法に基づく一般財団法人への移行は、平成24年11月22日認可が下り、12月3日移行登記が完了いたしました。関係者の方々のご協力に感謝申し上げます。

昭和47年、財団法人日本漢方医学研究所、

設立以来40年間に過ぎました。その間多くの先人、先輩各位のご指導、ご努力のおかげさまで本財団の事業、運営は順調に経緯して参りました。その間、行われました事業は、漢方医学講座（基礎講座、臨床医学講座）、漢方市民公開講座、漢方セミナー、『漢方医学』『類聚方広義』など書籍、機関誌『活』の出版、附属診療所に於ける臨床実技指導、臨床研究を行いました。

漢方医学の臨床研究を目的とし、平成8年度から18年度財団法人日本漢方医学研究所研究助成（研究件数は175件）を行いました。また鍼灸関連の事業として医師のための鍼灸セミナー、伝統鍼灸学講座などを行って参りました。学生（医学）を対象とした教育事業として日本東洋医学会が行っていた「漢方卒前セミナー」を代行いたしました。

国際協力としてWHO、JLOM（日本東洋医学サミット会議）への支援（人的・経済的）を独自で又は社団法人日本東洋医学会と

農協に卸すものは色も形も冴えないが、栄養価は高い。彼は、「どうして都会の人は、見た目で選ぶのかな」と首を傾げている。生薬の場合には、一応、指標物質が決められているが、最終的には漢方処方として十分な臨床効果が得られなければ意味がない。幸い、市販の生薬については指標物質だけでなく多くの構成成分についてデータベースが構築されてきている。今後、臨床効果との対応が望まれる。

年頭所感

行橋記念病院精神科

森 満

新年、明けましておめでとうございます。

浅学の身でありながら、こうして活に文章を書かせて頂ける事に感謝いたします。

漢方の世界には、日々助けられています。自分の身の丈に合ったことしか出来ませんが、何かお役に立てることがあれば嬉しく思います。

本年も宜しく申し上げます。

これからの漢方薬実習について考える

日本大学医学部内科学系統合和漢医薬学分野准教授

矢久保修嗣

本学では4年次学生に対して漢方薬実習を行っている。漢方薬などの香り、味など体験する貴重な機会を学生にもたらし、漢方医学に関する大きな意識の変化を学生に与えている。この実習では六君子湯の煎じ薬、これ構成する生薬、エキス剤などを直接手に取り、味をみたり、内服したりする体験をする。

しかし、これらを摂取する実習には議論も

ある。治療薬は生体に影響を与え、好ましくない反応が学生に発症する可能性だ。これに加えて、経口摂取では、食物アレルギーの危険は避けられない。半夏の摂取による不快な咽頭痛を学生が体験することもあり、一種のハラスメントであると考えられるものもある。

生薬やエキス剤、煎じ薬の内服を学生全員が実習として行うことは、本学では中止することになった。平成24年度は、生薬は手に取り、香りを経験する。煎じ薬とエキス剤はその剤形を観察し、香りを経験することを指示した。アレルギーなどの問題があるため、学生がこれらを摂取することは授業としては行わないことを説明した。それにもかかわらず、実習が始まると学生の半数近くが、生薬の味をみていた。半夏に関しても、1/3の学生は食していた。煎じ薬は学生のほぼ全員がのんでいた。学生は生薬、煎じ薬を体験し、楽しんでいるようにみえた。

この実習は必要だ。このためにも、方法や安全性に関する検討などが今後必要である、と私は考えている。

予防医学としての役割

慶應義塾大学医学部漢方医学センター

渡辺賢治

あけましておめでとうございます。

慶應義塾大学病院が完全予約制を導入してから1日に診察する患者数に制限ができ、以前のように午前中の外来で70人の患者さんを診る、などということが無くなったが、初診予約の受付が半年待ちの状態になっている。これは昨年春にNHKが漢方番組をいくつか組んだその影響であるが、いまだにその状態が続いている。昨年度は研修医が15名漢方を選択してくれたが、1か月間ともに勉強した中で、大学病院らしい珍しい症例が多く、西

年頭所感2013年

【活】編集委員長

足立秀樹

明けまして おめでとうございます。

今年も【活】をよろしく願い申し上げます。

何事にも反応の鈍い私は、ようやく昨年後半になってから放射線障害や原発事故に関する本を読み始めました。しかし読むほどに、わからなくなります。著者によって意見が異なり、全くバラバラです。医学の分野では、議論があったとしても、その時点で最も妥当とされる結論（ガイドライン）が申し合わされます。これがないと診断も治療も進まないからです。政治・経済という巨大な背景が絡むと、このような状況になるのかもしれませんが、これでは物事は進まないでしょう。

さて、このことで、情報の確かさを見極めるためには、情報提供者の背景にも大きな配慮が必要なことを実感しました。では情報提供者の背景は、どのように検証すれば良いのでしょうか。情報に対するメディアの論評にも注意が必要かもしれません。メディア自体の背景があるからです。こうなると公的国際機関というだけで信じてよいものかどうかさえも不安になります。

信頼性と、それを担保する条件について、なにか大きなものが失われているような気がします。信頼性を確保できそうな形式を考えて、それが満足されれば良いというようなものではないような気がします。

いったい何が失われたのか。多分、全員が満足するような結論はでないのかもしれませんが、私なりにイメージしてみようかなと思っています。

洋医学を含んだ総合診療としての漢方の役割を力説するのに都合がよかった。下肢リンパ形成不全が原因で起こるミルロイ病の症例は内科学会で報告し、英文誌に掲載される。卒業して以来25年以上の臨床でも初めて経験する症例も多く、また他科依頼の患者を当方で診断を下すなど、漢方の総合診療たる姿を若い医師に教えることができた。

しかしながら昨年のメディアの影響で集まってきた方々は、不定愁訴が多く、大学病院としての漢方外来の役割を考えさせられることが多くなった。特に高齢の整形外科的疾患の方が非常に多かったが、なかには骨の変形がひどく、脊椎の圧迫骨折や側弯、前弯などで苦しんでいるのをどうにか漢方で治して欲しいという方もおられた。しかしながら、そういう状態では漢方ができることは限られている。原因は筋肉量が落ちてきて、骨の変形を来し、筋肉が張ることによってさらに変形が進むという悪循環である。姿勢をできる範囲で保つことをお願いし、筋力を少しでもつけることでこれ以上の変形を防ぐことが重要である。

こうした患者さんの多くは、病気になっても医者がどうにかしてくれると思っている節がある。しかし、漢方の真髄は予防医療である。本誌の読者なので黄帝内経や千金要方の文を引用するまでもなく、未病の段階でちゃんと予防することが重要である。貝原益軒の養生訓でも、若いころから養生して老後の準備をする必要が説かれているが、筋肉を保つことは熱産生能力や血流を保つ意味でも非常に重要である。患者さんからは「貯筋」という言葉を教わった。50歳から80歳を過ぎた今でもスクワット50回を毎日欠かさない患者さんもいる。やはり老いに対しては予防が第一であり、治療には限界があることを幅広く知ってほしい。